



## 年間第 25 主日 (マタイ 20:1-16)

どの時点で恵みにあずかっても感謝できる人になる

「このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」  
(20・16) およそ 30 年、身近な例にうまく当てはめることができずに  
いましたが、今回はうまく当てはまりそうです。

先週、司祭館の床の間のある部屋から「骨壺」が出てきたと、前振り  
だけしておりました。賄いさんから「床の間の部屋を掃除すると、何  
だか肩が重くなるとかずっと見られている気がする」と言われたのです  
が、「そんなことあるはずがない」と相手にしてなかったのです。

そうしてしばらく経ってから、大声を上げて助けを呼ぶので泥棒  
か？と、床の間の部屋を見に行きましたら賄いさんが腰を抜かし、床の  
間を指差して座り込んでいました。「出た！」と言っているのです。

そこで床の間の引き出しを開けますと、何と「骨壺」が出てきました  
。さすがにこんな物は置いておけないと思い、風呂敷に包んで納骨堂  
に移動しました。あとで中を確かめました。何も入ってなかったの  
でひと安心です。誰が、どんな目的で置いていたのかは分かりません  
でした。もし皆さんで心当たりの方がおられたらご一報ください。また、近  
いうちに使う予定のある人も、ご一報ください。格安でお分けします。

さて今週の福音朗読、最後の結びは「後にいる者が先になり、先  
にいる者が後になる」となっています。私は正直、この部分が十分消化で  
きずにいました。30 年ものあいだです。

今年は突破口が見えた気がします。夜明け前に雇われた人から始ま  
って、最後は夕方五時に雇われた人までいたわけですが、「もう一度雇  
われることになったらどうだろう？」と考えてみたのです。

今回の一連の騒動の後に、もう一度広場で雇われることになったら、  
どうだろう？夜明け前に雇われ、一時間しか働かなかった人より多く賃  
金をもらえるだろうと思っていたのに、彼らと同じ一デナリオンしかも  
らえなかった人は、次の日、また夜明け前から仕事を求めて広場に立つ  
のだろうか？そんなことを思ったのです。

皆さんはどう思いますか？「最後に来たこの連中は、一時間しか働  
きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、こ  
の連中とを同じ扱いにするとはい。」(20・12) ここまで不平を言った人  
たちが、次も夜明け前に立つのでしょうか。十中八九、この人たちは夕方  
ギリギリにしか、広場に立たないのではないのでしょうか。

一方で、五時頃雇われ、一時間しか働かなかった人たちは、次に雇  
われる時にもっと早く広場に立つのではないかと思うのです。ずる賢い  
者もいるかも知れない。皆が皆ではないでしょうが、主人の寛大さに心  
を打たれ、一日分の賃金をもらえるなら、何もしないでいるよりは、ぶ  
どう園で汗を流そう。そんな人が出てくると思うのです。

夜明け前から働いて、結局賃金に不平を漏らした人は、「夜明け前  
から立っていても馬鹿らしい」と思い、一時間しか働かなかったのに主

人の寛大さに触れた人々は「早く広場に立って、この前のお礼にもっと長く働こう」と思う。これが、「後にいる者が先になり、先にいる者が後になる」ということなのではないでしょうか。

同じことは、洗礼をいつ受けたかということにも考えさせられます。今の時代、残念ながら幼児洗礼を受けた多くの人が、教会から姿を消しています。彼らは「夜明け前から」主のぶどう畑に入るのを許された人々です。ある人はこう言って、来なくなりました。「小さいうちに、一生涯ぶん祈りをしたから。」祈りがもたらす実りを味わう頃には、もう教会から遠ざかってしまいました。

一方で、成人してから洗礼を受ける人、結婚を機に洗礼を受ける人がいます。彼らが皆教会に留まっているわけではありません。私もそれは認めます。ただ、後で洗礼を受けた人は、受けた洗礼の恵みに感謝しています。自分で責任を持って洗礼を受けたので、自分が教会の家族に入れてもらったことを感謝しているのです。

できるなら、「結婚信者」とか「新信者」という言葉は無くなればいいなあと思っています。神の子となり、神から永遠の命に招かれ、神の家族とされた。いきさつはそれぞれですが、夜明け前に恵みを受けた人も、あとで恵みを受けた人も、主であるイエスの前で互いに喜び合える教会家族でいたいなあと心から願っています。

福音朗読に重ねて考えましょう。もう一度、洗礼を受けるとしたら、あなたはどのように行動しますか？「生まれてすぐに洗礼を受けるのは割に合わない。もう一度やり直すなら、人生の終わり、日暮れ前に受けて滑り込みたい」と思いますか。それともやはり生まれた時に洗礼を受けておきたいと思いますか。

今日、本来なら「福者カミロ・コンスタンツォ殉教祭」が焼罪（やいぎ）殉教公園で行われる予定でした。カミロ神父様は、燃えさかる火の中で殉教しました。ご自身の信仰と、私たちの信仰を、火で精錬するために、殉教してくださいました。カミロ神父様がもし、もう一度人生を与えられるとしたら、「洗礼は亡くなる直前で十分。殉教などとんでもない」と思うのでしょうか。

私をご本人ではありませんが、もう一度人生を与えられても、生まれた時に洗礼を受けて、殉教を求められたら喜んで殉教したのではないかと思うのです。「最後に回心したこの連中と、火に焼かれて命をささげた私たちとを同じ扱いにするのですか？」殉教者がこんなことを言うはずがありません。

最後の一人にまで寛大に恵みを与えてくださる神の思いを、もう一度考えてみましょう。「燃えて輝くともし火」（ヨハネ 5・35）となったださった福者カミロ・コンスタンツォ神父様の思いを、もう一度考えてみましょう。だれもが、洗礼に招かれた境遇を感謝できる人になれますように。だれもが、違った環境で洗礼に招かれた人を喜べる人になれますように。